

死ぬまで（懸賞文）：小説

著者	紅とんぼ
雑誌名	龍南會雑誌
巻	1 6 2
ページ	6 6 - 8 7
発行年	1916-12-25
URL	http://hdl.handle.net/2298/6670

死ぬまで

(縣實文)

一部三年甲 紅 と ん ぼ

春雨のしどくと降る日であつた。秀夫の父はこの日の夕方遂に歸らぬ人となつたのである。

秀夫が學校から歸つて來ると女中のおよしは、

「さあ、坊ちやま、着物をお着換へなさいまし」と云つてちやんと揃へてある新しい着物を持つて來た。

「おばあさんは」と秀夫は離れの方へ行かうとする、

「おばあさまはお留守で御座居ますよ、先程病院へ行らつしたのです、で坊ちやまがお歸りになつたら、私にすぐつれて來る様にと仰言つて御出掛なさいました、だから早くお着換へ遊ばせ、そして急いで參りませう
お父様がお悪いのかも知れませんが」

「何だい、それなら早くそう云つたらいいのに」秀夫は手早く帶を解いて着物を着換へる

「坊ちやま、帶が曲つてますよ」と直さうとするに五月蠅そうに

「いゝぢやないか急ぐんだもの」

「でも一寸お直しいたませう」

「や、この羽織に紐がないや、着ないで行かう」

「いゝね、今日はお天氣が悪う御座居ますから、召していらつしやいまし、お風を召すといけませんから――紐はすぐ取つて參ります」およしは大急で紐を取りに行く秀夫はもう玄關に出て居る、紐が付けられるや否や彼は表へ飛び出した、およしも、あはて、出たが二三歩行つて一寸引き返し、下の女中のお松に留守を頼んで、秀夫の跡を追つた。坊ちやんの姿はもうその角を曲つて居た、彼女はその角まで走つた、角を曲るとかなり賑かな通である、坊ちやんの姿より他は何も眼に入らなかつた彼女は直ちにその小さな姿が半町程先きにあるのを認めたので、前掛をからげて出来るだけ早く歩いた、と坊ちやんは突然歩みを止めた、下を向いて何かしはじめた、およしは何事か起つたのだらうと不安に感じながら尙も急いだ、近づいて見ると坊ちやんの片足は跣足である、

「どうかなさいましたか？」

「よし、鼻緒が切れちやつた」とさも困つたらしく仰言る、

「おやゝ、あんなにお急ぎになるものですから――おかしなさいまし」とおよしは小さな下駄を取り上げ片手で袂を探つて居たが何もないわと獨語して、白いハンケチを取り出して細く引きさいて、手早く鼻緒を立てた、その間にも坊ちやんは早くゝと急ぎ立てるのであつた。鼻緒を立て終つた時、およしはそれを坊ちやんに、はかせながら、今度は御一所に參りませうと云つて坊ちやんの手を引いて歩き出した。

およしは常によくこの坊ちやんに困らされる事があつた、けれども彼女は大變に可愛がつた。六つの時にお母様に死に別れ、何等樂しそうな事も見ず、お父様とお婆様とにたよつて行く小さな靈をこの上もないぢらしくも、氣の毒にも感じた、お母様のおなくなりになつたのは十月だつた、坊ちやんのお下が出来なさ

る時のお産でなくなられたのであつた、勿論その時は赤さんをお生み落しにはならなかつた。よしの來たのはその翌々月であつた、その頃はまだ坊ちゃんがお母様をお慕ひになつてみんな困つた頃であつた、やさしいおよしはほとんど毎日泣かされたそして前から居る下働きをして居るお松にお母様の事や、そのおなくなりになる時の事などを聞かされてどれ程その不幸な母様や、残された坊ちゃんに對して同情したか知れなかつた、およしは、偶然こうした家に奉公したのが、神の導きの様な氣がしてならなかつた、で色々な事を聞く度に彼女の坊ちゃんに對する事の決心は固められて行つた。實際彼女は坊ちゃんの大切な味方の一人であつた、旦那様はよく「よし、お前があれを可愛がつて呉れるからおれも安心だ」と仰言つて下さるし、御隠居様も一方ならぬ感謝を表して居られた、加之坊ちゃん次第にお懷きになるし、およしは自分の一生がこの家の爲に捧げられてもいいゝとまで思つたのであつた。實際このお懷きになつたと云ふ事が彼女の大きな喜悅にどれだけの決心を導いたか知れなかつた。一体この方は、内氣な方で、めつたにお友達なんかをお作りになる事がなかつた、人と話したり、さわいなりする事がお嫌ひだつた様に見えた、外で遊んで居らしても他の子供が來るとすぐ家へお這入になつてしまふ、お客さんがあつて坊ちゃんにお愛想をなされても變な顔をしてだまつて居らつしやつた、たとへそれがよく知つてゐる方であつても。けれども淋しく暮して居らつしやるだけ、心の内では人をお慕ひになる様であつた。この事がよく解つてゐるよしはもうお可愛相でならなかつたのである。で一生懸命にこの暗いお心を引き立てる事につとめた、その誠意が通じたのか坊ちゃんはおよしに懐き初められ此頃ではよしに對しては暴君であつた。こんな風であつたのでこの方の暴君である事がおよしには却つて嬉しかつたのであつた。お父様が病院へ御出になつてからよしは一層氣を付けてお世話をしたそし

て日曜にはきつと病院へ朝お送りして行くのであつた、日曜日は坊ちやんには人以上に楽しい日であつて、何の不平もなく一日を病院で、お父様のそばでお暮しになつた、お父様はこの坊ちやんの眞の理解者であつた、奥さんのおなくなりになつた後は多く人々から後妻を迎へる事をお進めになられたのだけれど絶体になれを退けられた、御病氣におなりになる前は毎日曜坊ちやんをつれて一日外でお暮しになるのであつた、この事が坊ちやんにどれ程樂しかつたか知れないのであつた、お父様は決して坊ちやんを他の子供の様に活潑に、所謂子供らしく、なる様には強ひられなかつた、たゞこの事に關しては自然とそうなつて行く様にと只管間接の方法を取つて居られた、だからお父様のお仰言るすべての事は少しも坊ちやんに、不安な考へや、不愉快な考を與へる事が出来なかつた。お父様のやり方をよく理解して居た人達はみんなその當を得て居る事を賞めて居た、お父様が病氣におなりになつて病院でお暮しなさらない事がこの父子の間に大きな垣を置いた、そして旦那様も坊ちやんもこの垣をどうかして除きたい、といつも望んで居らしたがつたがためであつた。旦那様は毎日でも坊ちやんに御會ひになりたいのだけれども、學校へ行つて居らつしやる坊ちやんを毎日引よせるのは悪い事だと思はれ、又若し自分が死ぬ様な場合にはそうする事が愛着の念を増す事だらうと思はれたので日曜日以外には決して來てはならないと堅く仰言つたのであつた。でよしも坊ちやんをつれて買物や何かで、たまに病院の近くへ行つても決してお寄りしなかつた、又よく理の解つて居る坊ちやんは決して寄らうとは云はれなかつた。それに今日は何うしたのだらう。病院から御隠居様に電話がかゝる、晝食もなさらずに御隠居様はすぐ御出掛になつた、そして日曜でもないのに坊ちやんをつれて上る様に仰言つた。こう思つた時よしの頭には變事と云ふ事が鋭く響き渡つた、若しや旦那様に萬一の事があつたら、

お、思つてもいやだ、恐ろしい事だ、あの坊ちゃんとは一体どうお成りになるだらう、思ふまい、こんな不吉な事は頭に昇してはならない、と一生懸命にその考へを押し隠さうとしたがそれは却つて反對の結果を導いた。坊ちゃんのお歸りになる三時が待ち遠しくなつてならなかつた、表の戸が開いて聲わた足音、坊ちゃんのだと直覺した彼女は手にして居た着換の着物を持つたまゝ玄關まで飛んで行つた、そして兎に角大急ぎで坊ちゃんをつれて、病院へと家を出た、そして途中で坊ちゃんの下駄の鼻緒が切れたのだつた、彼女は此鼻緒の事が氣に掛つてならなかつたのだけれど、病院へさへ行けばすべてが解るのだと坊ちゃんの手を取つて道を急いだ。やがて電車道へ出た、停留場は一寸南へ寄つた所にある、そこへ行つて電車を待つた

「よし、來たよ〜」

「はあ、参りましたね」と云ふ間にけたゝましくベルをならして××行の電車は近づいて來た。込んで居なかつた、それに二三人降る人があつたので幸ひ二人は腰を下す事が出來た。チン〜と車掌の合圖で、電車は南へ南へと走り去つた。さつきからしばらく止んで居た雨が又降り出した。

二

病人は眼を閉ぢて居る、動きもしない。醫師は白い手術衣の袖をまくり上げて注射器を持つて立つて居る、お婆様もおよしもみんな音と云ふものを立てずに不安な色を顔に表して立つて居る、永い沈黙、秀夫は夢の様に思ひながらやはり黙して立つて居た。懷中時計を見た醫者は「もう一つ」と云ひながら看護婦に合圖して、寢台に進み寄つた。病人の胸部は開かれ、細い針は黒ずんだ肌を貫いた、醫師の手は動いた注射器は直

ちに抜かれた。

何れの口から漏れたのか深い嘆息一つ、復も沈黙は續いた木の葉を打つ雨の音はかすかに響き来る。病院の庭にも次第／＼と夜の幕は降り來つた。濡鳥かあと鳴く。

「旦那様！」とおよしが突然小さくさげんだその時であつた、病人は細く眼を開けた、

「秀夫／＼」と呼んだ、秀夫は走り寄つた、だまつて父の顔を見入つた。じつと見返へして居た父の眼は再び閉ぢられた、醫者は時計をしきりに見て居た、沈黙は更に續いた、病人の眼は然しも開かれなかつた

京都に居る伯父さんは、伯母さんと共にこの日の夜東京に着いた、そうしてすぐ病院へ馳けつけたのだけれども、もう遅かつた

三

秀夫は京都の伯父さんの處へ引き取られる事になつた、伯父さんは秀夫の話が纏つた時秀夫の祖母をも引取りたいと云つてしきりにすゝめた。しかし彼女は自分が秀夫の母の親である事を考へ、且つは彼女の義理堅い處から堅くそれを拒んだ、それに一人で暮して行くには充分であつたしたので住み馴れた東京に居たかつたのである、彼女は秀夫をさへ自分の側におきたかつた、しかし秀夫はまだ幼い、これから立派な教育を受けなければならぬ身だから自分の様な者のところに置くのは或は其行先を誤る事になるかも知れないと思つたので秀夫のみは京都へ行く様にした。伯父は祖母の決心の鞏固なのを認めたので引取と云ふ話は止めて、今度は一人で住むにしても東京に居るよりは京都に來て居た方がよからうとすゝめて見た、この事は

祖母が案外容易に承知した。かうして彼等は京都で暮す事になった。

祖母の借りた家は百萬邊のお寺の近くに建てられた新しい家であつた、およしは勿論こゝに住む事になつて居た。或時叔父は祖母に素人下宿をやつて見る氣はないかと尋ねた、そして一人位學生を下宿さす方が面白いだらう、そんなに手のかゝる事でもなし、且楽しみだらうからとすゝめた。祖母も直ちにその氣になつてしまつた。それならいゝ人を世話しやうと云つて高等學校へ行つて人を紹介して呉れた。この人は多くの客の内伯父が一番すきな人であつたのだ。叔父はあなたの爲にも先方の爲にも都合だと思ひますから是非行つて下さいとこの人に頼んだのであつた。で人の好い彼は直ちにそれを承諾して伯父に好意を謝した。事と思ふ様に運んだので嬉しくてならなかつた、叔父はその人に秀夫の事や秀夫の家の事を話して聞かせた。そして秀夫を紹介したりした。

伯父と云ふ人は秀夫の父の眞個の兄に當る人で京都でもかなり名の賣れた樂器店を營んで居る。殊に學生には受けがよかつた。

叔父は秀夫の父より四つ年が上で三十四であつた、眞面目で商賣柄にも似ず地味な人であつたので、年もふけて見えた。そして商賣には大變熱心で、とても人の眞似られない程勉強し、お客との應待もよく行届いて居た、こんな事が店を繁昌させた原因にもなつたのであるが、これに關しては他に比較的有力なものがあつた。それはその妻君の力であつた。

叔父さんの家内と云ふのは、金持ではないが東京の家柄の娘であつて今年二十七になる人であつた。何でも音樂學校を出たと云ふ大變ハイカラな人で、伯父さんとは全く相反した性格を持つて居た、伯父さんの眞

面目で、お客としての人とより他は話し合ふ事をあまり好まないのに反してどんな人でも話の巧に出来る人、叔父さんの儉約家に對して、少しも物をがまんする事なく、欲しいものはどしどし買ふ、この事が時々二人の間に不和を起させた、買つて呉れと頼んでもだめだと思ふものは何でも勝手に買つて月末にそれを夫に支拂ふべく余儀なくさすと云つた風であつた、店の者で少し永く居る者はきつとこの衝突を見ねばならなかつた。それから伯父さんの外出厭ひに反して、出て歩く事の好きな事、芝居行などに對して一寸でも口を出されることもう不平でならなかつた。家政振りもなつて居なかつた。女中などを使ふのでも顎で指圖すると云つた風で内部はいゝが滅乱れて居た、が店へ出て人と應待したり、客と世間話をしたりする事はなか／＼上手であつた。自分がどんな不機嫌な時でも店に居る彼女によつてはそれを窺ふ事が出来なかつた。そして始めてこの店へ行つた人には、彼女がこゝの主婦である云ふ事が解らない程華やかな風采をして居た。その面長の、色の白い、富士額の、ぱつちりした黒眼勝の眼を持つた顔と、すらりとした体格はその風采を品のいゝものに見せた、人は彼女が丸髻に結びたのを見た事がなかつた。實際彼女はそんな髪は結はなかつたのである、彼女には人妻と見られる事が淡い苦痛であつた。そして年の寄るのを此上もなく苦にして居た。その癖、よく人に「もうお婆さんですから」などと話した。それに對して「何に、あなた様はまだお若くつて居らつしやいます……」とか「あんたはんがお婆はんやなんてお云ひやしたら、こつちやごないしまひよう」とか云ふ答を殊に女から得ない時は内心は決して平和でなかつた、そして何日かその人に對する惡口を云ふ事を忘れなかつた。

彼の女は店に出て居る事が好きであつた、道行く人がいつも美しく化粧をした彼女の姿を見ぬ事は稀であつ

た。こんな女だけに店頭の裝飾や何んかは至れり盡せりであつた、ショウウィドウの中は一週間に必ず新しい構式に變へられた。店の内も、常に厭味のない飾を保つて居た、この家だけは特に京都そのものと没交渉だと云つた風に見えて居た、こんな事が主として若い人、殊に學生の足を引いたのであつた、彼等はよくお主婦さんに云つた、

「この家は氣持がいゝ、みんなあなたのお手一つでせうね」と、これに對して

「いゝねそんな事は御座居ませんの、宅もあれでなか／＼熱心なのでしてね、――妾なんぞに碌な事は出来やしませんわ」と口を切つてすべてを主人の事の様に云つて見せる、しかし人はそれを聞くと却つてこの主婦のした事だと云ふ感じを持つ様になつて益々賞める、萬一惑ひの悪い人があつて彼女の言葉を其儘信じ相になると彼女は巧みにその反証を擧げて自然とその人からその惑ひを除いてしまふ。で上調子の男や、鑑察の鈍い者はすぐ彼の女の掌中に丸め込まれてしまふのであつた。

彼女と夫の間には咲子と云ふ八つになる女の子があつた、大變可愛い子であつた、夫婦は共に此子を大變に愛した、他に子供が出来ないものだから年と共にその愛は加つて來たのだつた、多くの點に於て異つて居る夫婦もこの子を愛すると云ふ點に於ては流石に一致して居た、然しこの點に於ても嚴密に云へば彼女には單なる親の愛と云ふものゝ他に或物を持つて居た、彼女は自己の虛榮心を満たす自己以外の生きた道具として咲子を愛した。娘を美しく飾つて喜んだ、まるで雛妓にでも作り上げるかの様な装をさした。そして何所へ行くにも飾り立てた娘をつれて行く事を忘れなかつた、この事は人妻らしく見られまいとする彼の女の努力と矛盾をして居たが、そんな事を考へる餘地はその虛榮心には無かつた。自分でつれて歩くのみならず、

芳子の同伴者として恥しからぬ人とならいつも、どこへでも、行かした。よく往き來をする呉服商の若旦那と云ふ人は常に咲子を可愛がつて方々へつれて行く人であつた、物見遊山に行く時藝妓の中に咲子を交へてつれて歩いたりさへした、がその母には却つてそれが満足であつた、芳子の玩具の内には藝妓の買つて呉れたものもあつた、そんなのが人の眼に止る毎に彼の女は「これは此間何某と云ふ妓が買つてやつて呉れたのです」などと得意で云つて居た。かうした行に對して心ある親族の者は彼女の夫と共に反對したが、それは何の功もなかつた。咲子の虚榮心はこんな時分からそゝられて行つたのであつた。

秀夫はかうした叔父の家庭に引入れられた、そしてこれまでとは全く異つた生活を送らねばならなかつた。彼は學校へ行つても知らない人ばかりではあるし、歸つたとき温るべき家庭を持たなかつた、夜などはしくし泣くのが常であつた、叔父はそれを知つて居たがたゞ子供の事だからとのみ思ひ込んで少し時が経てば、よくなるかと考へて居たので別に氣にも止めなかつた。叔母も同じ様に考へて早く面白く遊ぶ様にさせて樂しみたいと色々甘い言葉を並べて見た、が何の効果もなく一ヶ月あまり去つてしまつた。秀夫の喜ぶのは日曜の一日を百萬遍の祖母の所で暮す爲に家を出る時だけであつた。そして彼は曾て父を病院に尋ねた時の様に必ず毎日曜に行つた。彼の最大の苦痛は叔母の口から「そんな事をするとお婆さんの處へやりませんよ」と云はれる事であつた、で彼はこの條件の前にはまるで奴隷の様に振舞つた。叔父はそれが可愛相でならなかつた。叔母には却つて悪くらしく感ぜられた。そして時々咲子の前でよく小事を云つた。咲子はそれが面白かつた、でよく母に告げ口をした。若しその告げ口が父に話なされると、父は嚴しく咲子を叱りつけた、その時秀夫の頭にはいゝ氣味だと云ふ事しきや浮はないのであつたこの從兄妹の間にはかうして敵對心が萌芽して

行つた。咲子の方は常に側に居る母と云ふ味方があるのでいつも威張つて居た。叔母は芳子には色々な事に金をかけて居たが、秀夫には極必要なものよりは買つてやらなかつた、衣類でも秀夫のは芳子と同じ家に暮すものと思はれない程、ひどいものであつた、秀夫を百萬遍へやる時だけは新しい立派な着物を着せてやつた、こんな事の爲か無斷で百萬遍へ行く事は絶体に叔母によつて禁じられて居た、しかし叔母は感心な事に秀夫を學校以外に先生を撰んでそこへ通はして居た。此事を言ひ出した時、その心掛を叔父はいたく喜んだ。が此事は秀夫の爲を思つた彼の女の仕業でなく自己の安全を期する爲の彼の女の企であつた。

年は矢の様に去つて行つた人は皆同じだけの年齢を増して行く、秀夫も大きくなつた、自分の周圍に對して稍明らかな理解を持つた。彼の頭には叔父も叔母も芳子も乃至は祖母も權威あるものとしては置かれなかつた。彼に對して權威のあるものは自己であつた、そしてその自己に服従すべきものは自己以外に何もなかつた。彼は周圍の人に「すまない」とは感じて居た、自分なるものがなかつたならば、その人達の生活の或部分はもつと完全に行はれたであらうと思つたからである。だけれど決して感謝はして居なかつた、心からの感謝はして居なかつた。そして其感謝をしない事を道徳上悪い事だとも思はなかつた。彼が感謝したと云ふに近い心情を有したのはおよしに對してのみであつた。

秀夫はやはり日曜には百萬遍へ行つて居た、「秀夫も大きくなつたね」と祖母は嬉し相に云つては寺町の方は御變りないかいと叔父の方の事を尋ねるのであつた。そしてその次の質問はきつと叔母さんの態度についてあつた、それ等の間に對して秀夫は頗る冷淡であつた。彼はいつも、そんな事を尋ねたつて仕方がない

ぢやないかと云ふ様な心持で對したのであつた。けれどもお婆様は別に氣に止めもしないで、すぐ他の話を持ち出すので、時々はずまなかつたと云ふ考が彼の頭に上る事もあつた。およしはこれまでと少しも變らぬ親切さを持つて秀夫に仕へた。時にはつまらぬ心配をして秀夫に笑はれたりした。そんな時「ほ……私はまだ坊ちゃんを赤ちやん扱にして居ますのね」など、云つて共に笑つて居たがその實内心は眞から同じ心配を持續するのが常であつた。

秀夫の百萬遍へ来る目的は前とは大分變つて來た。此頃彼が此處へ来るのは慰安を求める事が主でなくて、祖母やおよしを喜ばす爲にであつた、祖母やおよしは此頃では秀夫以上に日曜の來るのを待つ様になつた。秀夫の心はこれ等の年から離れて行くのだらうか。否と答へられねばならない。彼の心は決して離れて行く事は出来なかつた、却つて時と共に深く結ばれて行くのだつたが彼は此人達との團圓によつて慰められない程成長して來た。慰安なくして人は生活の出来ないものである以上彼は何所かでそれを見出さなければならなかつた。彼には前途に大きな望を持つ事によつて楽しく暮すと云ふ事も出来ず、家庭なるものによつて心を喜ばすと云ふ事も出来なかつた。この「家庭」と云ふものに對しては、彼はたゞ人生の蛇足としきや考へて居なかつた、楽しい事よりも不快な事を多くこの名の元に經驗して來たので眞のホームのどれ程楽しくどれ程結構なものであるかと云ふ事は彼には解らなかつた。尙彼には學問それ自信に於て慰安を求め得るだけの元氣がなかつた。思出に耽つて慰む事も出来なかつた。それかと云つて戀に生きるにはまだ若かつた。こんな風で心の持つて行き處のなか秀夫は、好きな繪の方へ親しんで行つた。好きなだけ彼は幼い時から繪は上手であつた。彼の慰安は實に此處に在つた。しかも彼のこゝへ到達したのは極自然であつた。何處にか慰安を

求めて歩いた上句これを見出したのではなく。知らない内に自己をその園内に見出す様になつて居た。學校の展覽會の時など彼の畫は必ず異彩を放つて居た。先生方も友達もまだ少年である彼の手によつて書かれた作品の前では、繪その者より何も頭に浮べる事が出来なかつた。繪を描く時には暗い沈んだ彼の顔は生々とした元氣の充ち／＼た明るいものとなるのであつた。彼は好きな畫を描いて居る自分を此上もなく尊敬した、彼の慰安は他人からではなく彼自身から與へられたものであるから彼は決して失ふと云ふ心配を持たなかつた。秀夫は之あるが爲にのみ幸福であつた。

四

秀夫は中學を卒業した、成績は中位であつた、元來よく出来る方なのだけれど、繪の爲に他を顧みなかつたからこれは止むを得なかつた。彼は叔父に美術學校へ入れて呉れと頼んだ。叔父は考へた後で快くそれを承諾して呉れたがその代りに商業學校の夜學へ通ふ事を命じた。秀夫はそれを承知した。

かうして秀夫は京都市立の美術學校の本科へ入學する事となつた。毎日／＼勇んで通學をした好きな道のこととして出来もよく教授の連中を常に驚かして居た。その内には有名な畫家達とも知り相ひになるし。彼の將來の活動の基礎は日に日に築かれて行つた。三年間も夢の様に過ぎ去つて彼は優等の成績で卒業した、一方の商業の方もこれと同時に止めた、この方はそんなによくはなかつたけれども普通の商人たるには立派な資格と自信とを得たのであつた、

咲子は府立の女學校へ通つて居たが贅澤なので先生間の評判は善くなかつた。そして多辯なので友達にも

好かれなかつた。で彼女は學校へ行く事を好まず、來年の卒業の早かれと常に念じて居た。

叔父は咲子以外に子供がないので、秀夫を養子として家を相續させやうと企てゝ居た、秀夫の美術家になる事を許したのも夜學へ行く事を命じたのも此の爲であつた。但し之はまだ叔父一個の考に止まつて居て、他の人は誰れも叔父の考を知らなかつた。叔父は妻だけには兎に角云つておく必要があると思つて居たので折を見て口を切らうと思つて居た。

秀夫と咲子とをつれて百萬遍の祖母が芝居を見に行つた或る日の夜、叔父と叔母とは奥の室で話して居た。

「でもあなたあれ達は從兄妹ですもの」

「從兄妹だと、どうしていけないのだい」

「昔からそう云ひますは……」

「常に新しがる、お前にも似合はないね」

「人を馬鹿にして——、一体あなたはどうして又そんな氣におなりなすつたのですの！」

「さつきから話して聞かしたぢやないか、わからない奴だな——、いゝかい、家には子供と云つたら咲子一人だらう」

「わゝそうよ」

「男の兒がないな」

「わかつてるわ」

「だから咲子に養子をしなきゃ家を相繼さすものがない、處でだ、その養子として適當なのはあの秀夫だけだと思ふのだ、あゝしてあれが一人前の畫家にもなつたのだから家に居て仕事が出来ろし商業の方もやらしたらするから店の方もちやんとする事も出来やう、それに、性質があんなだから、商賣屋の主人としては適當だと思ふのだ、」

「あなたの仰言る事は理屈がある様で、無いんです、第一私達の間に今はなかつてもこれから男の兒が生れるかも知れないぢやありませんか、たとへ一步を譲つて無いとした處で何にもあんな兒を養子にするには及びませんわ、あんな陰氣な、男らしくない兒、——咲子がかawaiiさうぢやありませんか、祿に探してもしないで、あれがいゝなんて、あたかも無責任だわ」

「生意氣な事を云ふもんぢやない、お前などは人の表面ばかりより見る事が出来ないのだ、お前達が何と云つたつて己は思つた通りにするよ。」

「いゝわ、いけません、私が居る間は——」

と云ひかけて急に語調を變へて

「わゝごうぞさうなさいまし、あなたのお子さんですもの、咲子の母はこんな馬鹿者であれも不幸ですわね。」

「馬鹿な！」叔父は侮蔑と、呆れとを以て妻の顔を見詰めて居た、

ハンケチの一端を口に嚙へて居た彼女は、震へる手で他の端を確と握つて青い顔をして夫を見返して居たが、突然、

「くやしいッ」と叫んで、俯けに伏した。叔父は立上つて自分の室へ去つた。

叔母は秀夫を養子とさめてしまふ事が自分の前途を遮る様に感じた、彼女は咲子の養子を自分で探索する事を楽しんで居た、そしてそれが母親としての或特権であるかの様に思つて居た、だから今日夫から、相談と云ふよりは寧ろ命令としてあの事を聞かされたので此上もなく驚き、咲子の養子の事なんかまで考へても居るまいと思つてた夫を怪しみ、或は秀夫の祖母から頼まれて承知したのかとも思つて見た、如何にしてもこの考へを夫の頭から除かうとしたのだつた、いつも大概の事は負けて呉れる夫が今日に限つて頗る強硬であつたのに鼻柱を折られ、何うしても夫を動かす事が出来ないと感じたので、半分は亂心してしまつた、黙して室の中に伏して、何事を考へてるか自覺する事なしに一時間余を過した。少し理性を取り戻した彼女の頭に次に浮んだのは今後の方針であつた、如何にして自己の欲望を満足さすべきであるか、咲子をして反對せしめやうか、秀夫をして反對せしめやうか、否々、今までの處はあれ等二人は相厭つて居るらしいから、私達が嚴命を持つてするより外の場合決して一所にはなるまい、さすれば自分が先づ之をどうかして破壊しておかねばならぬ、急ぐには及ばない、事件の第一歩は今日に始まつたのも、その内に方法を講じやう、彼女はかう考へて、奥の室を去つて店へ來た、そこには三四人の學生が番頭を相手にして笑話しをして居た。彼女は早速例の愛嬌を振り散き始めた。

五

叙述の筆は南座へ行つて居る人達の上に移る、秀夫は従妹の咲子と一所に見て居るのが厭だつた、幕の開

いで居る時は流石に熱心に見て居たが、幕間には常に横を見廻して居た、彼を頭から馬鹿にして居る咲子も別に彼に話かけもしなかつた。それは彼に取つて却つて難有かつた。たゞ私かに心を悩ましたのは祖母だけであつた。秀夫はさうして四邊を見廻して、面白い畫題があれば直ちにスケッチブックに留めた。第三番目の幕間であつた、同じ様に畫題を求めて居た彼の眼を驚かした或物があつた。彼はしばらく見詰めて居た、そしてやはりスケッチブックの上に鉛筆を走らせた、頭が出来た、續いて上身、下身、これは特に彼が念を入れて描いたものであつたので、すべてに於てモデル其儘であつた、描き終つた彼は又も見詰めた。その顔の輪廓、その眼、その鼻その口、全体の態度、それ等はすべて彼が豫て望んで居た自分の理想の女を描くに適して居た、彼の欲した女は静かな女でなければならなかつた、そして女らしい品位がなくてはならなかつた、そしてどこかにさわやかな處がなくてはならなかつた、その爲には体格が重要であつて西洋人めいた体格でなければならなかつた。彼れはこれまでもかうした條件の本に探した、しかしそれは不可能らしく見たので、顔と体と別々に索めた、けれどもそれさへも出来なかつた、それに何うだ、自分の眼の前には、そのすべてを完全に備へた像があるのではないか、彼は心で何れ程喜んだか知れなかつた、彼女の着物の色合の巧みなる配合は一層そのビルドを美しく見せた、彼はその色を一々書き止め、帯などの模様も出来るだけ精密に描いて置いた。

従兄が熱心に何かしだして舞台へもあまり注意を拂はないので咲子は不思議に思ひながら、振返つた、しきりにスケッチをやつて居る、何をかしらと見ると若い女だ、従兄の視線の方向を見たら、居た。美しい方。まあ、あの方を……、彼女の嫉妬心は次の瞬間に燃わ初めた。けれども彼女は何食はぬ顔してすま

して居た、秀夫はそんな事は少しも知らなかつたのである。美しい人は咲子のクラスメートであつた。

此日から秀夫は魔の手に捕はれたのであつた。

彼はスケッチブックを取り出し、記憶を呼び起して、兎に角一つ書いて見やうとその翌日から取掛つた、けれども不思議な事には、常に繪に對しては完全な記憶が此場合は錯亂してしまつて、まどまらなかつた、彼は怪んだ、あれだけ見て置いたのに、と思つて考へて見るが、考へれば考へる程ますます錯亂して行つた、思ひ起す努力を止めた時にポーツとした全体の形が霧の様に現れた。彼は困つた、そして毎日、記憶を呼び起さうとした。しかしやはりだめであつた。彼は思つた、彼女は記憶すべくあまりに完全であつた、天使の様に、神の様に、そして自分の藝術はそれを描くには小さすぎる、しかし藝術家としての私の生命は彼の女を描く事に捧げられねばならぬ、私の作品の中で残さるべきものはその繪でなくてはならない。自分が彼の女をモデルとして描く日は来るであらうか。嗚呼それは全く望めない事に違ひない。彼は諦められたら諦めたであらう、しかし一度深く心に食ひ入つたこの考は決して諦め得られるものでなかつた。彼の煩悶は次第に大きくなつて行つた。一体あれは何所の女かしら、京都に住むものか、もしさうとすれば全く望みがないでもない。馬鹿な、私は馬鹿だ、處も解らないではないか、名前も解らないではないか、その女が何うして探せる、いくら藝術の爲に熱したと云つてもそれ位の事が解らないか。時を待たねばならない、若し天が自分を助けて呉れるなら又逢へるだらう。いくら自分を制しても、制し切れなかつた、毎日何にもせずに一室に考へ込んで居た、叔父も叔母も怪しんだ、咲子は怪しんで居る振をして居た、これが芝居へ行つてから一ヶ月程経た時であつた。彼の祖母は、日曜毎に來た彼がめつたに來なくなつたので心配し出した、

自分でも尋ねて來、又およしを呼びに寄越した事もあつた。始めの内は秀夫も悟られまいとつとめて居たけれど後では、面倒になつていゝ加減の事を云つて室へすつこんで仕舞ふ様になつた。自分でもその仕方の當を得て居らない事もよく解つて居た、一体自分は何うしてこんなに苦しまねばならないのかしら。彼の女が何だ、たゞそれがこんなに苦しめるのか知ら、これまでにこんな事は何もなかつた、適當な、自分が思つてゐる様な材料が得られない時でもこんな種類の苦しみをした事がない、——自分が彼女を求めて居るのは單に藝術の爲のみか知ら——こゝまで考へて彼は震へた、自分の心には藝術の爲だと思つて居た、今も居るのだけれど、おゝあの夢は何うだ、度々見た、しかし一度も自分が彼女を描きつゝあるのを見た事がない、夢の中の彼女はきつと自分の側に立つて居た、どんな時でも、どんな處でも、自分がどうして居る時でも、きつと立つて居た、自分はそれが樂しかつたではないか。あゝおれは戀して居るのだつた、そうだ戀して居るのだつた、それでよい、たとへ彼の女に逢へなくても、自分が戀してると云ふ事のみで澤山だ、かう考へて見ると少し氣が輕くなつた様だ。名前も、所も知らぬ、却つてそれがいゝかも知れない。自分の實はあのスケッチブックだ、あの繪の消えない様に、ペンで上を塗らうかしら、彼はスケッチブックを取り出して開いた、すぐその頁が出る、いや上を塗るのはこの繪を破壊する様なものだ、そうだバステル止めを塗つて置かう、彼はバステル留液の瓶を探した、しかし空のより見出し得なかつた、彼はすぐ買ひに出た。

歸つて來てすぐ室に入つた、液を塗らうとしてブックを見て彼は非常に驚いた、彼の女の畫の横に走り字で「柳の馬場押小路下ル」そして「木島雪子」と書いてあつた、これが彼の女の名かしら、それにしても誰が書いたものかしら、彼はこの謎を遂に解き得なかつた。其翌日彼の姿はその所に現れた、そしてその名の家を

發見して歸つた。彼はあの樂書が誰れの仕業かと考へて見た、疑ひ得るのは從妹よりなかつた、從妹がこの繪を見て彼の女と知つたのかしら、或はこれが咲子の友達の誰れかに似て居るのみで彼女でないかも知れない。しかし自分はどうしてもこの事を探究せねばならぬ。

こんな事があつてから秀夫は益々煩悶を重ねた、そしてそのもだを彼の藝術は解く權威を持たなかつた彼は繪を描く事などは思ひもよらぬ事となつてしまつた。そして彼は毎日、例の所をさまよつた。二ヶ月程した時にたゞ一人彼女らしい姿がその家へ入るのを見た。

秀夫の此事件が咲子の口から叔父、叔母の耳に入つた時、叔父は悲しみ、叔母は喜んだ、叔父は或日秀夫を呼んで色々と云つて聞かせた、秀夫は黙つて居た、叔父の話はたゞ秀夫の心を苦しめるにすぎなかつた。秀夫はそれから、前の様に鬱ぎ込んで暮した、それでも一ヶ月に一度位は百萬遍へ行つた、祖母やおよしは何度もく來た、が一度も元氣のいゝ秀夫を見る事は出来なかつた。

六

小春日和、空もうらゝかに晴れて、眞に天高さを覺ゆる或一日、秀夫は少し氣分が良かったので久し振に百萬遍へ行く事にして午後一時頃家を出た、懷には例のスケッチブックが在つた、いつもの様に熊野神社前で電車を降りて、てく／＼歩いた、三高の横を通り、大學と工藝學校との間の細い道を行つた、右側に道に沿つてずつとある高壓電線を何となく氣味悪く感じながら足を進めた、この道を突きぬげると白川街道に出る、左へ曲つて少しく行くと祖母の家である、祖母もおよしも秀夫の來遊を心から喜んで呉れた、秀夫も嬉

しく思つて上へあがつた、茶や菓子が出て、人々色々話しが交された、秀夫も笑つたり、近所の小供が遊びに来るのでそんなに淋しい思もしないとか、およしの江戸辯も皆な笑はなくなつた、そんな話から話は計らずも秀夫の幼時やその父母の事に移つて行つた、そんな話は秀夫にたまらなく悲しく響いた、遂に秀夫は涙を眼に浮べて聽いて居なければならなかつた。祖母は早くもそれを認めた。

「お前、お泣かね、ほんとにね、お父様や、お母様が生きて居らつしたら色んな苦勞もしないだらうにね」
「ほんとで御座居ますよ、妾はもう坊ぢやまがおかわいさうで——」およしはもう泣聲であつた。秀夫はもう居られなくなつて今日はもう歸りますと云つて別れた。

彼れは家へ歸らずに、清水の方へ行つた、こゝは彼の好きな場所であつたのでこれまででもよく來た事があつたのだ、石段を登りながら色々の事を思ひ廻らしてた。自分はやはり淋しい人間なのだ、何所までも運命に弄ばれて行くのだ、繪を書いてさへ居ればすべての苦痛は忘れられて行くと思つて居たのに、藝術より大きな力を見出さねばならなかつた、そしてそれが私を一層不幸に導いて行く。一体何うすれば自分の心は平安に保たれて行くのか知ら、何の爲に生れたのだらう。何故戀などをしたのだらう、いやしたのではない、そうなつたのだ、不可抗力だ、戀、戀が成功したとてその先は何だ失戀したとてその先は無だと知つた時に藝術が生れるのではなからうか、そしてその藝術は何んなものだらう、自分には解らない、解らないけれど、或形式となつてそれが現はれて來なければならぬ。その藝術によつて我々が打勝たねばならぬ或偉大なる物があるだらうか。あれば何であるか。石段を登つて本堂の方へぶら／＼と行く、まだ日が高いので參詣人は相當にある、彼は人に逢ふのがいやだつたから本堂の裏から山へ登り始めた、道は二つに別

れて居る、左へ行けば坂上田村麿の塚である右へ行けば稚子ヶ淵である、彼は右の方へ足を運んだ、人がめつたに來ないからであつた、道は進むにつれて細くなつて來る、本堂でなる鐘の音が寂寞を破る。彼は尙考へて來た、無だぞ知つた時の藝術？——それは宗教であるまいか、そしてそれに打勝或物、それは死であらう。死に打勝つものが戀であらう。戀が死より強いものならば、宗教より強くなければならない——解らない自分の考へはすべて誤つて居る、一体昔からの藝術家は何の爲に働いたのか、彼はいつの間にか稚子ヶ淵の岸に立つて居た。藝術家は神の藝術を模造するものに過ぎない、人間化さすものにすぎない。この點に於て彼等は僧と同じ地位に居るべきものだ、然らば宗教も藝術も實質に於て共に同じものでなければならぬ。戀！これは神の藝術の最上のものである、之を人間化さしたものは何であるか、之を模造したものは何であるか、神が興へたまゝに人は棄てゝ置いて、これを丸飲して居るではないか。それだから、人はまだ戀に苦しまねばならない。消化出來ないからであるこんな事を考へて居る、自分にも今日の自分か解らない。彼の私の唯一の女、私は他の女を知つてはならない。この水、青い青い、彼の女の髪のように。自分が今死んだら、——何うなるであらふ、このまゝ死んで行く、明日の太陽を見ないで世を終る、自然の姿はあまりに恐ろしい。おゝ又鐘が鳴る。自分の心は百年も前に京都の町を去つて來た様な。靜かな水、彼の女の様に、おゝ又鐘が………………。靜かな水の面は時ならぬ、動搖をなして破れ、若者は永久にその鏡の下に眠つてしまつた。四邊は再び元の如く、淋しく暗く。そして穩やかに。

(終り)